「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

（第 2 期第 29 号-通巻第 41 号）

発行：2023 年 10 月 10 日

関根友彦追悼特集号 1

パート 1　経済学原理論（「資本の弁証法」）（2）

田中史郎

（宮城学院女子大学名誉教授　stanaka@mgu.ac.jp）

値形態論における商品名と数量

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-29-2

http://www.unotheory.org/news_II_26

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter
事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治
E-mail:contact@unotheory.org
ホームページ http://www.unotheory.org

価値形態論における商品名と数量
－関根翻訳を媒介にして－

Commodity name and quantity in value forms
－ Through T.Sekine, *Principles of Prirical Economy* －

田中 史郎（TANAKA, Shiro）
（宮城学院女子大学名誉教授）
e-mail　stanaka@mgu.ac.jp

はじめに
1．宇野の提起と価値式
(1)「資本論研究会」での発言
(2)『価値論』と、それ以降の研究
(3) 価値式における表現の変更の意味
2．関根翻訳における価値式
3．第Ⅱ形態以降の課題
(1) 第Ⅱ形態（拡大された価値形態）
(2) 第Ⅲ形態（一般的な価値形態）
(3) G 形態（貨幣形態）
4．結語

【要旨】
すでにかなりの時間が経過しているが、関根友彦によって宇野弘蔵『経済原論』が翻訳された。いわば「世界標準」のテキストが誕生したのであって、その意義は大きい。
そうした中で、本稿では、「リンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する」（『経済原論』）でおなじみの価値形態論の「価値式」に注目した。この表現は『資本論』と比較すると、相対的価値形態にある商品の名称と数量との記述の順序が逆になっている。後に宇野が「あれは少々得意の点かも知れない。」（『資本論五十年』）と述べているように、これは極めて周到に準備された表現だった。
こうしたことが翻訳という制約の中で、どのように活かされているかを検討し、ひとつの代替案の提起を試みたものである。

はじめに

関根友彦氏が宇野弘蔵『経済原論』（いわゆる『新原論』）を英訳し出版したことは知られている。それは、Thomas T. Sekine, *Principles of Political Economy－Theory of a Purely Capitalist Society－*,（Harvester & Humanities, UK & USA, 1980）に他ならない。

本書が英語圏の読者に寄与したことはいうまでもないが、われわれも『経済原論』で気になった表現を本、関根英語版で確かめたりしたものだ。

そうした中で、価値形態論のいわゆる価値式[1]において、気になる問題がある。宇野の価値式ではマルクス『資本論』のそれと微妙に異なる表現がとられており、それが関根翻訳においてはどうなっているのか、気になった。すなわち、価値式において商品名とその数量の記述の順序がどのようになっているかという問題である。切り詰めていえば、「10 ヤールのリンネル」か「リンネル 10 ヤール」か、といういわば些末な問題である。本稿では、そんな些細なことにあえて拘泥してみたい（以下、敬称略とする）。

１．宇野の提起と価値式

(1)「資本論研究会」での発言

まず、マルクス『資本論』とは異なる、宇野弘蔵の価値形態論とりわけその価値式の形成過程を辿ることからはじめよう。まず、価値形態論の全体にかかわる第 I 形態（簡単な価値形態）を軸に吟味することにする。

周知のように、宇野は、マルクス『資本論』と異なり、冒頭の商品論（商品の二要因論）において、労働による価値の実体規定が与えられないものとしてこれを退け、純粋に形態論として価値形態論を再構成した。この試みは、『価値論』を経て、旧・新の 2 つの『経済原論』として結実したが[2]、それに至るまでに必然的な道程があったことはいうまでも

---

[1] 「リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶」のような式を「価値式」と呼称することにした。しばしば、これは、「価値方程式」や「価値等式」とも呼ばれる。事実、『資本論』冒頭の第 1 章・第 1 節「商品の二要因」には、以下のような記述がある。「二つの商品、たとえば小麦と鉄とをとってみよう。この関係は...一つの等式で表すことができる。...1 クォーターの小麦＝a ツェントナーの鉄というように。」（『資本論』50 頁）。みられるように普及している岡崎次郎訳の『資本論』では、Gleichung が「等式」と訳されているが、辞書的には「方程式」と翻訳することもできよう。たとえば、向坂逸郎訳の『資本論』では「方程式」と記されている。

しかし、この式は、数学的な意味での方程式ではないし、またストレートに等式というには躊躇するものがある。前者にかんしていえば、この式が「未知数を含みそれがある特定の値をとるときだけ成立する等式」という方程式の基本的定義を満たしていないことは自明であろう。また、後者にかんして補足すれば、この式をもって、マルクスならば商品の生産に費やされた労働量が両辺とも等しいと述べるかも知れないが、宇野がそのような断言を行うとはなかろう。よって、やや曖昧ながら、価値式と呼ぶ。

[2] 旧・新の 2 つの『経済原論』は内容的にはほぼ同様な著作といえる。そこで、両者の区別の必要がな

ない。

この問題にかんする宇野の最初の提起は、敗戦まもなくの 1946 年に開かれた「資本論研究会」における発言にある。これは後に『資本論研究』[3]として出版されており、そこで宇野は以下のように述べている。

「リンネルが相対的価値形態にあって上衣が等価形態にあるという場合、リンネルは何故上衣を等価形態にとるに至ったか、それにはリンネルの所有者の欲望というものを前提しないでよいだろうか、そういう関係を離れて斯ういう形があり得るだろうか。」（『資本論研究』157 頁）[4]

これが、後世に語り継がれる、価値形態論において相対的価値形態にある商品にその「所有者の欲望」を導入するという方法的な問題の提起である[5]。

この発言は研究会参加者の想定をはるかに超えるもので、その内容や提起された問題の意味は全く理解されなかったようだ。この研究会は 3 回目となるが、議論が噴出して速記が追いつかず、後日ふたたび同じ内容で研究会が開催されたとのことである。

したがって、『資本論研究』に収録されている「第 3 回　価値形態論」は 2 度目の研究会の内容である。宇野による先の発言は前回と同様であり、それが繰り返し述べられたようだが、それでもなかなか理解されることはなく、議論はかみ合っていないようだ。

例えば、「他人のための使用価値というのがその所有者を想定することになる」（同、167 頁）という発言や、「価値形態論の中に交換過程の章の内容を含めて考える」（同、142 頁）などの提起も前回と同様な内容だと思われるが、本書を読む限り、議論はかみ合わず空回りに終わっている。

また、『資本論』では、周知のように、価値形態論の前にいわゆる労働価値説の論証が

い場合には『経済原論』と、その差異を明確にする必要がある場合にはそれぞれ『旧原論』、『新原論』と略記する。

[3] この研究会の内容を収録した『資本論研究』には、各回によって欠席者もいるが、「研究会参加者」として大内兵衛、高橋正雄、久留間鮫造、相原茂、向坂逸郎、岡崎三郎、宇野弘蔵、鈴木鴻一郎、有沢広巳、末永茂喜、土屋喬雄、対馬忠行の 12 名があげられている。また、研究会は、1946 年から毎月 1 回のペースで全 10 回行われたというが、本書においては全 9 回の記録として収録されている。それは、価値手形態論を検討する第 3 回の研究会が 2 度行われたからである。

[4] 引用したように、宇野は、早い時期から、価値形態論に商品所有者を想定する方法を強調してきたが、それは積極的には相対的価値形態に立つ商品にたいしてであって、等価形態にたつ商品の方ではない。宇野は後に次のように述べている。「…簡単な価値形態でも一方に（相対的価値形態にたつ方に－引用者）に所有者を認めて、他方に（等価形態にたつ方に－引用者）特定の所有者をあげない方がいい…」（『資本論五十年』780 頁）という。これは、価値形態が、対等な両者双方の物々交換ではなく、あくまでも相対的価値形態にある商品所有者の一方的な要求であり、そしてその要求は基本的には成就しないことをも含意している。

なお、こうした点について廣松渉は「…A（相対的価値形態にある商品の所有者－引用者）にとって B（等価形態にたつ商品の所有者、この場合は上衣所有者－引用者）は没個性的な人格、たんに上衣の生産・所有者というかぎりでの人物たるにすぎない」（廣松渉[1974]、140 頁）とし、これを「B als das Man」（同上）と表現する。B が上衣の生産者であることはこの場合には必ずしも必要な条件とはならないが、それはともあれ、これは適切な表現方法だと思われる。

[5] 商品所有者の欲望を導入するということは、具体的にはその行動を吟味することに他ならないので、このような方法は、後に「行動論的アプローチ」ともいわれることもある。

示されて、それを前提として価値形態論が展開されている。宇野もこの研究会の場ではこれを乗り越える理論を積極的に展開しているわけではないが、それでも価値形態論の意義を吟味しつつ、社会的労働との関連を以下のように述べている。

「リンネルが相対的価値形態にあって、上衣が等価形態にあるという意味での社会的関係だ、だからどちら（相対的価値形態にある商品と等価形態にある商品－引用者）へも社会的労働が含まれているという意味ではない。...上衣の方の社会的労働はここでは問題になっていない。上衣の使用価値そのものがリンネルにとっては社会的労働を代表する価値物になっている。」（同、171 頁）

すなわち、第 1 に、相対的価値形態にあるリンネルにも等価形態の上衣にも労働が投下された生産物であったとしても、価値形態論においては、上衣に投下された社会的労働は問題にならないと述べられている。そして第 2 に、相対的価値形態にあるリンネル所有者にとっては、あくまでも、上衣の使用価値が問題になっているということだ。いいかえれば、リンネルの価値が使用価値を持つ上衣によって表現されているのであって、上衣の価値は表現されていない。リンネルの社会的労働が上衣の使用価値として現れている、と。

それゆえまた、宇野は、価値式の両極がいわゆる労働価値説の成立を前提として「ひっくりかえる」という通説に批判を加えている。

「ひっくりかえるごとに位置が替わって来るわけだ、...どっちにでもおきかえていいというのではない...。」（同、175 頁）

ここで、「ひっくりかえるごとに位置が替わ」るというのは、先の価値式の左右辺をひっくりかえすと、今度は、上衣の価値が使用価値をもつリンネルによって表現されるのであり、リンネルの価値は表現されないことを意味している。ここで「ひっくりかえる」というのは、しばしば「逆転の論理」や「逆関係の論理」とも呼ばれるが、そうしたことが無理であることが示されている。つまり、ここで価値式の両辺は対極的であり、非対称性をもつことが述べられているということもできる。数学でいうところの等式の対称律[6]がここでは成立しないということであろう[7]。

こうした論理は、価値形態論に「商品の所有者」を想定するという提起からその延長線

[6] 対称律とは、数学において、ある a と b につき a = b が成立している場合には、いつでも b = a が同時に成り立つということを意味する。なお、化学反応式においては、両辺の質量が等しいものの（その意味で等式だが）、反応の不可逆性を示すために、等号ではなく、矢印が用いられている。なお、可逆性を強調して示す際には両矢印や反対矢印を添えた形で示される。

[7] また、『資本論研究』には、次のような記述がある。「. . . ところが商品になると相対的関係にあるという時にも対象をそれぞれ異なった位置におく、こちらにあるものと向こうにあるものとの対立となって、向こうにあるもの同士の対立とは違う、自然弁証法がはっきり理解出来ないのは、向こうにあるものの対立としているからだという気がするのです。商品の場合所有者を入れるとはっきりと分かって来るということは、そういう意味です。」（『資本論研究』177 頁）。ここでは、「自然弁証法」と呼ばれるものが、価値形態論の方法と異なることが示されている。自然弁証法においては観察者や分析者はその対象と位相の異なる位置にあるのに対して、価値形態論においてはこれとは違う方法がとられているということであろう。これを広松渉の言を借りれば、「学知が...リンネル商品を相対的価値形態として、そして上衣商品を等価形態として論考を進めうるのは、リンネル所有者の側に視座を構えるかぎりにおいてである。」（廣松渉[1974]、132 頁）となる。すなわち、価値形態論にあっては、学知（観察者や分析者）は、相対的価値形態にある商品所有者の側に視座をおいて考察を進めることが求められていうことであろう。

上に矢継ぎ早に展開されているもので、その発展のさらにその先には、冒頭の商品論における労働価値説の論証の放棄（止揚）、そして流通形態としての価値形態論の展開が導かれることは想像がつく。価値形態論においては、両極の商品に労働が投下されているということを前提にする必要はないからである。むしろ、流通形態としての価値形態論において価値式の両辺が「ひっくりかえる」ということは価値式の意義を損なうものであること、その非対称性が強調されることになるわけである。

この研究会での検討の進め方は『資本論』の構成を前提としているので、「価値形態論」の前に「商品の二要因論」、「労働の二重性論」などが検討されている。そこではいわゆる「蒸留法」[8]による価値論の論証が当然視されてきたが、この点においても宇野は抵抗を試みている。

「さっきの説明にもあったように、労働生産物の使用価値を抽象して行く、これを僕は単純に直ぐ、使用価値を抽象して行くという風に理解すると、いろいろな誤解が起きるのではないかと思う。これは僕の一つの解釈だが、（労働の－引用者）二重性の問題でも、後に労働過程と価値増殖過程が説かれる、あの第 3 篇第 5 章、あそこまでの間に、...つまり価値形態から第 2 篇の終わりまでの間に、この抽象自身が行われるのではないか、使用価値の抽象をそういう風に僕は解釈したらいいのじゃないかと思う。」（同、89 頁）

みられるように、かなり控えめながら、価値論の論証が冒頭の商品論においては成立せず、それを労働過程と価値増殖過程に移すべきただという方法が示唆されているといえよう。使用価値の抽象が、価値形態論から第 2 篇の終わりまでの間に行われるというのは、貨幣論や資本形式論においては価値の実現や価値の増殖が目的とされることをさし、そして、価値論の論証はこうしたことを前提として労働の二重性論を踏まえた価値形成増殖過程でなされるという構成を提起していると考えられる。その意味で、後に旧・新の『経済原論』における体系構成、すなわち、まず流通論をおきその後に生産論を位置づけるという構成が構想されているともいえる。つまり、『資本論』の体系構成に異議を唱え、それに対して積極的な対案が、示唆的ではあるもののここで示されていると考えられるのである。

以上、戦後まもなくの「資本論研究会」での発言を検討しつつ、宇野の構想を辿ってみた。

そうした中で注目されるのが、価値式の表現にかんしてである。原著であるドイツ語版の『資本論』（*Das Kapital*）においては、周知のように、第 I 形態（簡単な価値形態）は、「20 Ellen Leinwand = 1 Rock」（K.,p.63）または「20 Ellen Leinwand sind 1 Rock wert.」（K.,p.63）などと表現されている。また、英語版の『資本論』（*Capital*）においても、ドイツ語版の語順と同様に「20 yards of linen＝1 coat、 20 yards of linen are worth 1 coat.」（C.,p.48）となっている。そして、標準的な日本語版では、これが、「20 エレのリンネル＝1 着の上着」や「20 エレのリンネルは 1 着の上着に値する」（『資本論』65 頁）と翻訳され記されている。相対的価値形態にあっても、等価形態にお

[8] 『資本論』においては、冒頭の「商品の二要因」において、商品の交換関係からその使用価値の捨象、そして抽象的人間労働の導出を行い、さらにそれを価値として概念化している。こうした方法によって労働価値説が成立というわけである。これは、不純物を含む液体から蒸留によって純水を分離する方法に因んで「蒸留法」と呼ばれている。

いても、それぞれの商品が「数量・商品名」の順に記述されているのである。

こうした背景には、後にみるように、欧州圏の言語には、ある物の数量を表現する際には、数量が先でその次に物の名前が示されるという特徴があることも関係しているが、そればかりでなかろう。『資本論』においては、価値式の両辺が「ひっくりかえる」というような論理が含まれていたが、そうしてことも影響しているのではなかろうか[9]。

そして、宇野のこの「資本論研究会」においての発言も、「20 エレのリンネルは 1 枚の上衣に値する」（『資本論研究』166 頁など）という表現になっている。相対的価値形態（左辺）の商品も等価形態（右辺）の商品も、それらが「数量・商品名」の順に示されており、これは、『資本論』（ドイツ語版、日本語版など）における表現と同様である。基本的には『資本論』の記述を踏襲したものと思われる。やや先回りしていえば、この段階においては、「リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶」（『旧原論』31 頁）や「リンネル 20 ヤールは 1 着の上着に値する」（『新原論』22 頁）という表現は登場していないのである。

確かに、相対的価値形態（左辺）が、「20 エレのリンネル」（数量・商品名の順）でも「リンネル 20 ヤール」（商品名・数量の順）でも全く問題はない、これらの示す意味は同様である、という見解もあろう。むしろそうした理解の仕方が普通かも知れない。

しかし、これから検討するように、これら両者には意味が異なることが宇野によって語られている。この点は価値形態論の核心を突くものの一つであり、吟味に値する。

(2) 『価値論』と、それ以降の研究

ところで、この『資本論研究』は、研究会（座談会）の口頭での発言を記録したもので、いわゆる「書き言葉」ではない。本研究会の翌年、1947 年に刊行された『価値論』は、書き言葉であるとともに研究書の形式であるので、理論内容もより厳密になり進化したものになっている。宇野にあっては、以前からそうした構想が存在していたか否かは定かではないが、『価値論』においては明確化した内容が示されている。それゆえ次いで、『価値論』の内容を吟味しよう。

『価値論』の構成は、「第 1 章　価値の実体」、「第 2 章　価値の形態」、「第 3 章　価値の本質」となっている。第 1 章と第 2 章のタイトルをみると、『資本論』と同様に、まず冒頭で労働による価値の規定や価値論の論証を行い、それを前提として価値形態論を展開しているようにみえる。「実体」、「形態」という言葉がそれを思わせる。

だが、内容に立ち入ってみると、第 1 章においていわゆる蒸留法の論理で価値の実体規定がなされているわけではない。また、内容的としては、第 2 章で、価値形態論はもとより、貨幣論、資本形式論が示され、第 3 章では、労働・生産過程、価値形成・増殖過程が展開されている。ここにおいて、後の『経済原論』の第 1 篇流通論（商品、貨幣、資本）と第 2 篇生産論の 3 分の 1（資本の生産過程）までが展開されているといえる。こうした点は、宇野における独自の理論形成がどのようになされたかを吟味する際には貴重なものだ。だが、それには立ち入らず、本稿の主題と関係する冒頭の部分に注目しよう。そこで

[9] 『資本論』のように、価値式の両辺の表示方法（商品名と数量の記述順序）が等しければ、両辺は容易に「ひっくりかえる」というロジックに親和性を持つ。反対に、両辺の表示方法が異なっていれば、それら両辺は対極的であり、価値式が対称性を持たないことを示すことになろう。

は労働価値説の論証を積極的に排除しているわけではないものの、『資本論』に対していわばギリギリの譲歩を行っていつつ、自説を示唆しているようにみえる。

「…価値がかかる労働の現象形態としてそのまま現れているわけではない。商品経済は各商品の価値を、価値を形成する労働の結果としてそのまま表示するものではない。商品経済はあらゆる社会に共通なるこの原則を実現するために廻り道を必要とする。…商品社会は、個人的生産物の供給にたいする社会的需要の関係をもって強制することによって遂行しなければならない」（『価値論』281～82 頁）

やや分かりにくいが、ここでは、商品は労働生産物でありその価値は労働によって規定されているとはいえ、それが直接に現れることはないこと、そうした点がまず第 1 に示される。そして、第 2 に、資本主義が 1 つの社会として存立するには「あらゆる社会に共通なる…原則」[10]が満たされなければならずその核心が労働による価値規定であること、しかし、第 3 に、それは市場での需給による強制（調整）という「廻り道」を通してなされること、これらが述べられていると理解できる。いいかえれば、市場での需給調整を前提として労働の内実が吟味されるという構成の提起である。これは、第 1 章における記述だが、このような論理を展開するのであれば、もはや労働云々という内容を冒頭の商品論で行う意味は薄い。むしろ、この議論は、流通論を踏まえて、労働や生産を扱う場面（『資本論』の構成では「絶対的剰余価値の生産」）で行うことが妥当だろう。先に譲歩と述べたのはこういう意味である。

『価値論』においては、第 3 章で、後の旧・新の『経済原論』に結実するような、労働生産過程および価値形成増殖過程が展開されている。そして、そこで実質的に価値論の論証が行われているといえる。第 3 章において以下のような記述がみられる。

「資本家にとっては、労働力なる商品をその価値によって支払うということは、生活資料なる商品をその価値によって販売することにほかならない。」（『価値論』235 頁）

みられるように、やや敷衍していえば、ここにおいて労働賃金すなわち労働力商品の価値と販売される商品の価値との基準が、いわゆる買い戻しの関係を基軸として成立することが示されている。価値形成の意味と、価値論の論証がこのような枠組みでなされることが構想されているといえよう。

このように、『価値論』においては、萌芽的とはいえ、価値論に関係する議論が、先の『資本論研究』の座談会と比較すると、明確な姿を現していることを確認できる。では、本稿の関心事である、価値式の表現にかかわる問題に移ろう。

『価値論』の価値形態論においては、第 I 形態の価値式が以下のように示されている。

「リンネル 20 ヤールは 1 着の上着に値する」（『価値論』292 頁）、「リンネル 20 ヤール＝1 着の上着」（同、293 頁）[11]

[10] 「あらゆる社会に共通なる…原則」は後に「経済原則」呼ばれる。それは、『旧原論』においては「人間の物質的生活資料の生産、再生産」（『旧原論』20 頁）と規定されている。しかし後には、そこにいわば経済効率性を含めて概念化しているようにみられる叙述もある。例えば「経済的に有利なものとして採用することは経済の原則である」（『新原論』4 頁）とある。経済原則は、経済法則とともに、経済学にとって基本的な概念ゆえ、立ち入った考察が必要であろう。

[11] 宇野においては、価値式を表現する際に、『資本論』で示されているそれと同様に「＝」（等号）が用いられている。しかし、日高晋[1964]、山口重克[1985]、菅原陽心[2012]などは「→」（矢印）で示している。そうすることによって、数学でいう対称律が成立しないということ、価値式の方向性が

明らかなように、ここでは等価形態にある商品（等価物）の名称と数量（数量と名称）の表示順序は『資本論』と同様なものの、相対的価値形態にある商品のその表現方法が異なっている。相対的価値形態にあるリンネル商品とその量が、「商品名・数量」の順に示されているのである。『資本論』の表現にあえて異を唱えていることはいうまでもない。こうした点にかんして次の記述がある。

「価値を量的に表現せんとする相対的価値形態にある商品、リンネルは、かえってその使用価値としての一定量によってその価値を表現するものではなく、等価形態にある商品、上着の一定量にたいしてその価値を表現することとなる。」（同、293 頁）

平たくいえば、リンネル所有者にとっては、欲望の対象である 1 着の上着が存在し、それを獲得すべく手持ちのリンネルの数量を示すということである。「1 着の上着」という場合、その数量である「1 着」は独立に決まるのにたいして、「リンネル 20 ヤール」の「20 ヤール」は、主観的にではあれ、目的の「1 着の上着」を獲得する適当な分量として従属的に決まる、ということであろう。価値式にあっては、等価形態（右辺）の数量が独立変数であるのに対して、相対的価値形態（左辺）のそれは従属変数であること、これらが示されている。別言すれば、価値式の両極の意味の違い、両辺の非対称性が強調されているといえるのである。

そして既述のように、『旧原論』においては、「リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶、即ちリンネル 10 ヤールは、5 ポンドの茶に値する」（『旧原論』31 頁）という形で示されることになる。また、『新原論』では、「リンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する」（『新原論』22 頁）という表現になっている。

この価値式の表現をめぐっては、『資本論研究』では曖昧だったが、『価値論』において結論に達し、それ以降には変化が見られない。すなわち、サンプルとして例示されている商品名やその数量に違いはあるものの、相対的価値形態にある商品においては「商品名・数量」の順で、等価形態に立つ商品では「数量・商品名」の順で記述がなされている。これが、この問題についての宇野の最終的な結論であるといえる。

(3) 価値式における表現の変更の意味

これまで、宇野における価値式の表現の変遷過程を辿ってきた。このようみると、価値式での商品名と数量の記述の順序にかんしては、その背後において込められた明確な意思のあることが想像されよう。まさに興味深い点である。こうした問題について宇野は後の『資本論五十年』において、質問に答える形で以下のように述べている。

「たとえば価値形態論で先生は、『10 ヤールのリンネル＝5 ポンドの茶』でなく、特に『リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶』としていられる、そういういい方について…。」（『資本論五十年』762 頁）

示されることなどの点で画期的である。だが、矢印の場合には、相対的価値形態に立つ商品所有者主体の、主観的ではあれ、その価値を対置しているという点が十分に示されていないのではないかという疑問が生ずる。したがって、それらの折衷案として「⇒」（等号矢印）が考えられるのではなかろうか。なお、このような等号矢印は、大内力・戸原四郎・大内秀明（原理論部分は大内秀明執筆）[1966]、大内力[1981]、田中史郎[1991]などが採用している。

こうした質問にたいして、宇野は以下のように答えている。

「…あれ(相対的価値形態にある商品の名称と数量との記述の順序を、『資本論』とは逆にしたこと－引用者)は少々得意の点かも知れない。価値形態ではきみのいうように『リンネル 10 ヤールはイコール 5 ポンドの茶』といったときに…リンネル幾ヤールというのは、たくさんのリンネルの中から 10 ヤールとか、20 ヤールとかというんで…。しかし 5 ポンドの茶というのは、1 ポンドでなくて 5 ポンドほしいという意味で、5 ポンドというのを上へつけたんだ[12]。つまらないことに理屈をつけたことになるが、等価物の使用価値に対してリンネルの価値を対置したつもりだ。」（『資本論五十年』762～3 頁）[13]

やや繰り返しになるが、相対的価値形態にあるリンネル商品の所有者にとっては、欲望の対象である等価形態の商品、ここでは茶は先見的にその数量が確定しており(独立変数)、それら（数量と商品）が一体となって欲望の対象になる。そしてそれを前提として、対置する商品は手持ちのもの、つまりリンネルだが、その数量はいわば相場や主観的な判断に基づいた値（従属変数）として決定されるということであろう。一定量の使用価値をもつ等価物に対して相対的価値形態にあるリンネル商品の価値はまさに相対的に対置されるという意味である。

これを、宇野は、「つまらないことに理屈をつけた」とやや謙遜しているが、そこには並々ならぬ思いがあったのではなかと想像できる。時間をかけて練り上げられてきた論理ではなかろうか。

すでにみたように、宇野の価値論にかんする研究は、戦後まもなくの「資本論研究会」での発言を起点として、その後、『価値論』、そして旧・新の『経済原論』を通して完成に向かっていったといえるが、価値形態論においては、それは価値式の表現を『資本論』とはあえて変えたことに現れていると思われる。

このような経緯を辿って、価値形態論の第 I 形態（簡単な価値形態）の価値式のフォームが形成されたといえる。初期の『資本論研究』での発言においては、必ずしも完成していなかった価値式の表現方法は、『価値論』で結実し、そして『旧原論』、『新原論』に引き継がれた。第 I 形態の価値式は、『価値論』以降、「商品名・数量＝数量・商品名」という表現になっている。『価値論』における「リンネル 20 ヤールは 1 着の上着に値する」、『旧原論』の「リンネル 10 ヤールは、5 ポンドの茶に値する」、『新原論』の「リ

[12] ここで、例示として「リンネル 10 ヤールはイコール 5 ポンドの茶」と述べられているが、それは『旧原論』での価値式を前提としているといえる。ちなみに、『新原論』を前提とすれば、「リンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する」という例示になろう。つまり、こうした表現方法、つまり左辺においては「商品名・数量」の順で、右辺では「数量。商品名」の順で表現方法は、『価値論』においてすでに示されており、以降は変更がない。だが、宇野においてはおそらくは『旧原論』で最終的に確定したと判断しているのではないか。それゆえ、例示された価値式は『旧原論』のそれであったと考えられる。

[13] ほぼ同様なことは、『旧原論』において、以下のように示されている。「相手の商品の方の使用価値の一定量が先ず決定されていて、これに対して価値を表現しようとする商品の使用価値の量をもってするという形式で表現せられる。」（『旧原論』32 頁）。「リンネルを商品として所有する者が自分の欲する五ポンドの茶に対してならばリンネル 一〇ヤールを交換してもよいという関係を表示するもの」（同、33 頁）。等価形態にたつ商品の数量が独立変数であり、相対的価値形態の商品の数量は従属変数であることが示されている。

ンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する」という価値式の表現方法はこのように定着した。これは、宇野価値形態論の 1 つの到達点であるといえよう[14]。

２．関根翻訳における価値式

では、このような意味を込めて記された宇野による価値式は、関根によってどのように英語版に翻訳されたのであろうか。

周知のように、関根英語版は『新原論』を底本として翻訳されたものである。その原著『新原論』には目次が簡略化され、「章」までの区分しかなく、したがって「節」のタイトルである「価値形態」の見出しもない。だが、内容に立ち入って見ると、価値形態に当たる箇所は明確に判断できる。

その部分とは、「例えば特定の商品リンネルは、その所有者がそのリンネルと交換して得ようとする、他の商品の使用価値の一定量をもって、その価値を表現せられる。」（『新原論』22 頁）である。ここから価値形態論が開始される。

これに対して、翻訳は以下のように示されている。

「A particular commodity, for example linen, expresses its value by a definite quantity of the use-value of certain other desired by the linen-owner.」（P.,p.5）

みられるようにほぼ直訳に近い形で記されている。

そして、本稿で問題とする価値式が示されることになる。原典の『新原論』では、「リンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する」（『新原論』22 頁）の部分であるが、これが以下のような英文になっている。

「twenty yards of linen are worth one coat」（P.,p.5）

原典の『新原論』では相対的価値形態にある商品は「商品名・数量」、等価形態に立つそれは「数量・商品名」の順で示されているのにたいして、みられるように、関根翻訳においては、左右辺の何れも「数量・商品名」の順になっている。

これは、先に示した『資本論』英語版の表現、「20 yards of linen are worth 1 coat」（C.,p.48）と同様であるといえよう。

いうまでもなく、英語では可算名詞であっても不可算名詞であっても、その数量を表す語（数詞、数量を表す形容詞・形容句）が先に示されその次に名詞が来るのが普通の表現である[15]。したがって、相対的価値形態の twenty yards of linen という表現も当然のことであろう。その意味で、異論を挟む余地はない。

しかし、これまでみてきたように、宇野が思いを込めた価値式の表現が可能ならば、それを翻訳においても試みる意義があるのではないかと考えられる。

すなわち、等価形態の「one coat」はそのまま、「数量・商品名」の順の記述で変更す

[14] そしてこうした価値式の表現は、宇野理論を基本的に継承するかなりの論者に受け継がれている。たとえば、以下の著作がそうである。日高普[1964]、大内力・戸原四郎・大内秀明（大内秀明執筆）[1966]、岩田弘[1972]、降旗節雄[1974]、武井邦夫[1974]、大島清編（小林弥六執筆）[1976]、山口重克[1985]、奥山忠信[1990]、田中史郎[1991]、小幡道昭[2009]、菅原陽心[2012]。

[15] 多くの人が one dog や a glass of water などという表現を中学時代から練習させられてきたのではなかろうか。

る必要はない。しかし、相対的価値形態の「twenty yards of linen」を、「商品名・数量」の順に変えて示すことは不可能だろうか。あえて「linen, twenty yards」のように表すことが出来ないだろうか。価値式全体を示せば以下のようである。すなわち、「linen, twenty yards are worth one coat」、「linen, 20 yards are worth 1 coat」あるいは、「linen, twenty yards ＝one coat」、「linen, 20 yards ＝1 coat」というようになる。

そして、ドイツ語においても、以下のような表現になろう。すなわち、「Leinwand, 20 Ellen sind 1 Rock wert.」、「Leinwand, 20 Ellen ＝1 Rock」と。

このようなことが可能ならば、欧米圏の読者に一石を投じることになるのではなかろうか。価値式において、その相対的価値形態（左辺）と等価形態（右辺）では意味が異なることが明確に示され、それが強調されることであろう。むろん、こうしたことは文法の常識を逸脱したものとして、奇異に映るかも知れない。そうであるが故に、関根翻訳においてはきわめてオーソドックスな英語表現が選ばれたことであろう。原典に忠実な直訳を基本において、なおかつ正当な英語表現をもってなされた関根翻訳は、きわめて貴重でその意義は大きい。

だがそれにしても、相対的価値形態にある商品を、例えば英語においても「商品名・数量」の順に示すという表現が許されるならば、それを提起する意義は認められよう。それによって、欧米における資本論研究、なかんづく価値形態論研究が大きく飛躍するのではないかと思われるのである。

これまで価値形態論の全体に関連するという意味もあって、主にその第Ⅰ形態を俎上にのせて検討してきた。では、それ以降においてこの問題はどのように考えられるであろうか。第Ⅱ形態、第Ⅲ形態、貨幣形態における課題を吟味しよう。

３．第Ⅱ形態以降の課題

（1）第Ⅱ形態（拡大された価値形態）

まず『資本論』における第Ⅱ形態をみると、周知のように、それは、第Ⅰ形態の価値式の右辺に様々な商品が羅列される形で示されている。マルクスは「商品Ａの個別的な価値表現は、商品 A のいろいろな単純な価値表現のいくらでも引き伸ばせる列に転化する」（『資本論』84 頁）として、以下の価値式を導いている。

「20 エレのリンネル＝1 着の上着　または　＝10 ポンドの茶　または　＝40 ポンドのコーヒー　または　＝1 クォーターの小麦　または　＝2 オンスの金　または　＝1/2 トンの鉄　または　＝その他」（『資本論』84 頁）

既述したように、宇野においてはこの相対的価値形態にある商品にその所有者を想定するという方法をとるので、第Ⅱ形態はこのようにはなり得ない。価値形態論、なかんづく相対的価値形態にある商品にその所有者を想定する方法においては、価値式の等価形態にたつ商品の数量が独立変数であり、その相対的価値形態にある商品の数量は従属変数であった。したがって、従属変数である相対的価値形態の数量が全て同量（20 エレのリンネル）ということはあり得ないことになる[16]。それは、本稿で論じている商品名と数量の記述順

[16] 第Ⅱ形態を拡大された価値形態という場合、何が「拡大された」のかを問う必要があろう。商品所

序の問題というより、それ以前の問題であろう。ともあれ、この点にはこれ以上は立ち入らないで、本稿の課題とする価値式の表現方法について検討しよう。

先の『資本論研究』においては、第Ⅱ形態以降にかんする積極的な検討はなされていないので、『価値論』を対象にする。『価値論』にあっては、第Ⅰ形態において、すでに『資本論』の表現とは異なっていたので、第Ⅱ形態でもそれが踏襲されることになる。すなわち、相対的価値形態にある商品は「商品名・数量」の順で、等価形態にたつ商品は「数量・商品名」の順で記述されている。むろん、相対的価値形態にある商品の数量（従属変数）は、それぞれの等価物の数量（独立変数）に対応して、それぞれの価値式で異なることになる。以下のようである。

「リンネル 20 ヤール＝1 着の上着（衣）　／　リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶」（『価値論』301 頁）

そして、この価値式の表示方法は、『旧原論』にも引き継がれることになる。『旧原論』において、それは以下のように示されている。

「リンネル 10 ヤール＝5 ポンドの茶　／　リンネル 20 ヤール＝1 着の上衣　／　リンネル 40 ヤール＝1 トンの鉄　／　リンネル x ヤール＝y 量の A 商品」（『旧原論』35 頁）

この例に示された「リンネル x ヤール＝y 量の A 商品」という記述は、価値式においてその商品名と数量の表記問題を明確に示している。左辺においては「商品名・数量」、右辺においては「数量・商品名」と文字式の形で表されているのである。

そしてこの点は、『新原論』においても同様である。

「リンネル 20 ヤールは 1 着の上衣に値する　／　リンネル 2 ヤールは半ポンドの茶に値する　／　リンネル 40 ヤールは 2 クォーターの小麦に値する」（『新原論』25 頁）

このように辿ると、この第Ⅱ形態の価値式の表現の問題は、『価値論』で完成し、その後には変更がなかったといえよう。

では、この点は、関根翻訳においてどのようになっているだろうか。以下がそれである。

「twenty yards of linen are worth one coat ／ two yards of linen are worth half a pound of tea ／ forty yards of linen are worth two quarters of wheat」（P.,p.6）

すでに、第Ⅰ形態について検討したさいに示したが、ここでも相対的価値形態にある商品は「数量・商品名」の順で示されている。その理由は、これもすでに述べたが、通常の英語の表現方式に従ったものであろう。その意味で、異論を挟む余地はないが、ここでもあえて、以下のような表現を提起したいと思う。

linen, twenty yards of are worth one coat ／ linen, two yards are worth half a pound of tea ／ linen, forty yards are worth two quarters of wheat

あるいは

linen, 20 yards of　are worth 1 coat ／ linen, 20 yards ＝1 coat

---

有者の欲望が拡大したという説もある。だが、それでは第Ⅰ形態においては欲望の対象が 1 つに限定されることを示すことが不可欠になるが、それは無理な想定となる。はじめから欲望が複数であることは排除できないからだ。そうだとすると、第Ⅰ形態においても商品所有者の欲望は複数であることを前提として、しかしそれを積極的に明示しなかったと考えることが妥当だろう。そうであれば、第Ⅱ形態においては、すでにある多くの欲望を開示したという意味で「拡大」したといえるのではないか。

という表現も可能であろう。

以上が、本稿での代替案である。等価形態にたつ商品は「数量・商品名」の順で変わりはないものの、相対的価値形態にある商品についてはあえて「商品名・数量」の順で表示したものである。

では、第Ⅲ形態はどうであろうか、続いて吟味しよう。

(2) 第Ⅲ形態（一般的な価値形態）

第Ⅲ形態（一般的な価値形態）にかんして考えたい。この形態をめぐっては古くから研究の対象とされてきた。周知のように、『資本論』においては、第Ⅰ形態から存在するいわゆる両辺の逆転の論理を第Ⅱ形態に適用して、第Ⅲ形態を導いている。第Ⅱ形態の左右辺を機械的に入れ替えたものが第Ⅲ形態だとされている。すなわち、『資本論』においては、「そこで、20 エレのリンネル＝1 着の上着　または　＝10 ポンドの茶　または＝その他　という列を逆にすれば、すなわち事実上すでに...含まれている逆関係を言い表してみれば...」（『資本論』87-8 頁）として、第Ⅲ形態が以下のように示される。

「20 エレのリンネル＝　／1 着の上着＝　／10 ポンドの茶＝　／40 ポンドのコーヒー＝　／1 クォーターの小麦＝　／1/2 トンの鉄＝　／x 量の商品 A＝　／等々の商品＝　20 のリンネル」（『資本論』88 頁）

確かに『資本論』においては、周知のように、商品論の冒頭で価値論の論証が完結したものとして、それを前提として価値形態論が展開された。それゆえ価値形態の第Ⅰ形態においては価値式両辺の逆関係の成立が強調されたのである。したがって、それを第Ⅱ形態に適用して第Ⅲ形態を導出するという方法には、それなりの一貫性が成り立っているといえないこともない。

だが、第 1 に、そもそも、商品論の冒頭での労働価値説の論証が可能かという疑問、第 2 に、そうだとしても、相対的価値形態と等価形態の性質を吟味すると、価値式の両辺には対称律が成立しないのではないかという疑問、これらが宇野によって提起されたのであった。これらの疑問は当然であるとともに、意義深いものであったといえよう。

さらに付け加えるならば、第 3 に、『資本論』のように、逆転の論理を用いて第Ⅱ形態から第Ⅲ形態を導くと、それはまた大きな矛盾をはらむことになることだ。かねてより指摘されてきたことだが、この論理は、当然にも、第Ⅱ形態においてリンネル以外の他の商品にも当てはまり、それらが同様に逆転されるという事態を引き起こす。つまり無数の第Ⅲ形態が導出されることになる。これは、『資本論・初版』（本文）にあったいわゆる「第Ⅳ形態」（形態Ⅳ）の問題である。別言すれば、こうして導かれた第Ⅲ形態（一般的価値形態）は、それが一般的でなくなるという迷路に入り込むことになるのである[17]。

[17] 知られているように、『資本論・初版』においては、「本文」で以下のようにして「第Ⅳ形態」（形態Ⅳ）が導出される。まず「リンネルに当てはまることは、その商品にも当てはまる」（『資本論・初版』75 頁）として多数の第Ⅱ形態を想定し、それに逆関係の論理を適用する。そうすると当然にも多数の価値式が導かれ、これを「第Ⅳ形態」（形態Ⅳ）という。つまり、第Ⅲ形態はリンネルという 1 つの等価物に対して価値表現をすることによって一般的価値形態ともよばれ、そのたった 1 つの等価物は一般的等価物とされたが、そうではないことが露呈したわけだ。この価値形態論では貨幣の導

このような『資本論』の価値形態論に潜む逆転の論理を第Ⅰ形態の段階から退け、価値式を根底から組み替えた宇野の提起は、後にみるように、第Ⅲ形態の導出を「共通等価物」の出現に求めることになる。だがこの点をめぐっては、宇野の叙述にやや紛らわし点が含まれてもいる。

『価値論』においては、第Ⅲ形態の直前には以下のような文言がある。

「拡大された価値形態はそれ自体のうちにその形態を顛倒した形態、マルクスのいわゆる一般的価値形態を展開せざるをえない…。」（『価値論』301 頁）

そして、この一文をもって以下のような第Ⅲ形態が示されている。

「上着 1 着＝20 ヤールのリンネル ／ 茶 5 ポンド＝10 ヤールのリンネル ／ コーヒー 10 ポンド＝5 ヤールのリンネル ／ 小麦 2 クォーター＝40 ヤールのリンネル ／ 金 10 オンス＝200 ヤールのリンネル ／ 鉄 半トン＝20 ヤールのリンネル ／ A 商品 X 量＝Y ヤールのリンネル」（『価値論』301～2 頁）

みられるように、この形態では、第Ⅱ形態の左辺におかれていた「リンネル」が全て右辺におかれ、反対に、第Ⅱ形態の右辺の「上着」などの商品が全て左辺におかれている。そこで、第Ⅱ形態の左右辺を逆にしたものが第Ⅲ形態のようにもみえる。また、事実、「顛倒」という用語も使用されている。つまり、宇野の第Ⅲ形態の導出には、『資本論』と同様に、逆関係の論理や逆転の論理が利用されているのではないかという理解（誤解）を招いた。

だが、ここで注目すべきは、価値式における商品名と数量の記述方法である。第Ⅱ形態における右辺の「1 着の上着」が、第Ⅲ形態では左辺に記されているとはいえ、それは、「上着 1 着」という表現になっている。つまり、「上着」という商品の名称と数量の表示が、等価形態にたつ場合と相対的価値形態にある場合とでは異なっており、前者では「数量・商品名」の順に、後者では「商品名・数量」の順に示されている。相対的価値形態の商品の数量は従属的に決定することが強調されていたが、その意図がここで示されているといえよう。

また、第Ⅱ形態の相対的価値形態にある「リンネル 20 ヤール」が、第Ⅲ形態では等価形態に来ているとはいえ、それは、「20 ヤールのリンネル」となっている。つまり、「リンネル」という商品の名称と数量の表示が、相対的価値形態にある場合と等価形態に立つ場合とでは異なっており、前者では「商品名・数量」の順に、後者では「数量・商品名」の順に示されている。もっとも、この点、つまり、第Ⅲ形態における、等価形態の表示方法は、実は、『旧原論』に至ると変容しているが、この点は後に検討する。

いずれにしろ、『価値論』においては、「顛倒」という用語が用いられておりややもすると、『資本論』のような逆関係の論理が利用されているようにみえるが、価値式に立ち

出という課題は満たされていない。「一般的な等価物はまだけっして骨化されていない。」（『資本論・初版』75 頁）といわざるを得ない事態に至ったのである。逆転の論理や顛倒の論理を適用すれば、こうしたことは必然的に生じることである。

もっとも、『資本論・初版』においては、「付録」として再度「価値形態」が本文以上に詳しく展開されている。そこでは「貨幣形態」というタイトルもあり貨幣が導かれているようにみえるが、それは第Ⅲ形態まで用いられていた逆転の論理を曖昧にすることにより成立してものであって、相変わらず難点が克服されたわけではない。

入ってみると、そうではないことが明であろう。価値式における商品名と数量の表示は重要な意味をもつことを確認しておきたい。

では、『旧原論』における第Ⅲ形態はどうだろうか。先に示唆したが、『旧原論』に至ると、第Ⅲ形態において、『価値論』のそれとは微妙な差異がみられる。

まず、第Ⅲ形態の導出だが、それは次のようなこの一文をもって行われている。

「あらゆる商品がリンネルを等価形態におくとすると、拡大されたる価値形態は顛倒されて、同時に多少変化して次のごとくにもなる…。」（『旧原論』38 頁）

ここにおいても「顛倒」という文言が使用されているので、先の『価値論』におけるような理解（誤解）を招く紛らわしい表現であることは事実である。

しかし、『旧原論』においては、より明確な論理をみてとることが出来る。

「あらゆる商品の拡大されたる価値形態においてつねにその等価形態におかれる商品の出現がそれである。いわば全社会的に交換を求められる商品は、もはや単なる商品とはいえないものに変わって来るのである。」（『旧原論』37 頁）

さらに、ここに付された「注」では、以下の文言がある。

「むしろかかる直接的欲望から遠いものほどあらゆる商品所有者にとって、共通の等価物としてあらわれる…。」（『旧原論』37 頁）

ここにおいて、3 つの点が重要な意味をもつ。その第 1 は、「つねにその等価形態におかれる商品の出現」という指摘である。これを先に「共通等価物」と言ったが、そのような共通等価物の出現こそが第Ⅲ形態を導くという論理があらわれることになる。第 2 は、そのような等価形態におかれる商品は「もはや単なる商品とはいえないもの」になるという指摘である。第Ⅰ形態、第Ⅱ形態において等価形態に立つ商品は、相対的価値形態の商品所有者にとって直接的な欲望の対象とされてきた。それが宇野の提起した核心であった。だが、ここで「もはや単なる商品とはいえないもの」になるとは何を意味するか。そして第 3 には、このような商品は、必ずしも直接的な欲望の対象ではないこと、つまり、それから遠いものが選ばれるという指摘である。

すなわち、第Ⅲ形態における等価物は、それを獲得することを通じて迂回的ないし間接的に初期の欲望をみたす手段になるということである[18]。第Ⅲ形態の等価物は、それまでの等価物とは意味するところが異なると考えられるのであろう。それらの内容を満たす第Ⅲ形態の価値式は『旧原論』において、以下のように示されることになる。

「茶 15 ポンド＝リンネル 30 ヤール ／ 上衣 2 着＝リンネル 40 ヤール ／ 鉄 3 トン＝リンネル 120 ヤール ／ A 商品 x 量＝リンネル y ヤール」（『旧原論』38 頁）

これを、先の『価値論』における第Ⅲ形態と比較してみると、右辺、等価形態にたつ商品の表示方法が異なっている点が注目されよう。ここでは、等価形態に立つ商品は「商品名・数量」の順で記述されているのである。

第Ⅱ形態までは等価形態の商品が「数量・商品名」の順で記されていたが、第Ⅲ形態に

[18] そうだとすると、第Ⅲ形態における等価形態に立つ商品は、それまでのように直接的な欲望の対象であるとともに、間接的なそれが加わることになろう。そうだとすると、そのような商品の例として何が相応しいか、そしてその際に数量はどのように増える（変わる）のか、といった点の吟味が必要であろう。事実、『旧原論』の第Ⅲ形態においては、前の第Ⅱ形態と比較すると、価値式のそれぞれの数量が増加した形で示されている。

おいてはあえてそれを変更したのには、深い意味が込められていると考えられる。それは、既述のように、第Ⅲ形態の等価物は、「単なる商品とはいえないもの」あるいは「直接的欲望から遠いもの」というのがそれである。そうしたことを含んだ表現として、第Ⅲ形態の等価形態にたつ商品は「商品名・数量」の順で記述されたと思われるのである。ここでも、価値式の表示方法が重要な意味をもつことを再度、強調しておきたい。

ところで、『新原論』においては、第Ⅲ形態は価値式の形では明示されていない。立ち入ってみてみよう。

「各商品所有者は、直接己の欲する商品をもってその価値を表示し、その商品所有者のから一般的には期待しえない交換を待つと言うのではなく、間接的にではあるが、まず一般的にあらゆる商品に対して直接的に交換を要求しうる商品…との交換を求めるということになる。」（『新原論』27 頁）

ここでは、みられるように、第Ⅲ形態は「間接的」な意味をもつ等価物を対象とした形態であることが示されている。そうだとすれば、ここでその等価物に相応しい商品を等価形態においた価値式が示されて然るべきだが、それが明示されていない。なぜだろうか。次の指摘が示唆していると思われる。

「この場合はすでに等価物の使用価値は必ずしも直接消費の対象をなすものとしてではない。…一般的等価物は等価物商品として最も適した使用価値を有する商品に帰着する。」（『新原論』27 頁）[19]

やや繰り返しになるが、一般的等価物が直接消費の対象ではなく、それに適した商品に「帰着」するということは、帰着するまでは幾つかの一般的等価物が存在するということ、すなわち、第Ⅲ形態が流動的ないし星雲的な状態であることを意味するものではなかろうか。つまり、第Ⅲ形態を静止したような価値式で示しにくいということであるように思われる[20]。それゆえ、『新原論』においては、明示的な価値式は存在しないということであろう。

では、この部分は、関根翻訳においてはどのように示されているだろうか。以下がそれである。

「He would rather evaluate his commodity in terms of the one that is universally wanted, and indirectly achieve his purpose by means of this particular commodity which now possesses the power of immediate exchangeability for any other desired commodity.」（P.,p.7）

周知のように、関根翻訳は『新原論』を底本にしているので、翻訳においても価値式は示されない。この部分は、日本語のセンテンスと一対一対応しているわけではないが、その核心部分を示せば上のようであろう。

むろん、翻訳なので、原著を逸脱することはできない。しかし、『旧原論』の価値式においては、それ以前の『価値論』でのそれを踏まえ、より洗練された形で第Ⅲ形態が示さ

---

[19] このような指摘は他にもみられる。「一般的価値形態は…貨幣形態への過渡的形態だから等価物の使用価値が、すでにある程度一般的使用価値（形式的使用価値－引用者）に転化してきている…。」（『資本論研究Ⅰ』255 頁）

[20] 第Ⅲ形態が流動的であり、それを静止画のような価値式で示すことが難しいとしても、何らかの形でそれを示すことが可能ではなかろうか。

れていた。そこで、それを英文で表示することは出来ないだろうか。それが許されるならば、以下のようになると考えられよう。

tea, 15pounds＝linen, 30yards ／ coats, 2 ＝linen, 30yards ／ iron, 3tons＝linen, 120yards ／ *A* commodity, *x* ＝linen, *y* yards

むろん以下のような表現も同様である。

tea, 15 pounds are worth linen, 30 yards ／ coats, 2 are worth linen, 40 yards ／ iron, 3 tons are worth linen, 120 yards ／ *A* commodity, x amount are worth linen, *y* yards

これはリンネルを等価物においた価値式の群だが、他にリンネル以外（例えば煙草など）を等価物においた価値式の群が成立していることも示されよう。

（3）G 形態（貨幣形態）

最後に G 形態（貨幣形態）について検討する。ここでも『資本論』の吟味からからはじめよう。

周知のように『資本論』においては、第Ⅲ形態を前提として一般的等価物の地位を「ある一定の商品が歴史的にかちとった。すなわち金である。」（『資本論』94 頁）とされ、貨幣形態が導かれている。そして、「形態Ⅳ（貨幣形態）は、いまではリンネルに代わって金が一般的等価形態をもっているということのほかには、形態Ⅲと違うところはなにもない。」（『資本論』94～-5 頁）とされる。

こうして、『資本論』においては、第Ⅲ形態の等価物の商品に「金」を代入した以下の価値式をもって貨幣形態としている。

「20 エレのリンネル＝ ／1 着の上着＝ ／10 ポンドの茶＝ ／40 ポンドのコーヒー＝ ／1 クォーターの小麦＝ ／1/2 トンの鉄＝ ／x 量の商品 A＝ 2 オンスの金」（『資本論』94 頁）

これまでみてきたように、宇野はこれに批判的な見解をもち、対案を示している。まず『価値論』をみよう。以下のように示されている。

「鉄 1 トン＝2 オンスの金 ／ 小麦 1 クォーター＝1 オンスの金 ／ モカコーヒー 1 ツェントネル＝2.5 オンスの金 ／ ・・・・ ／ A 商品 1 単位＝X オンスの金」（『価値論』306 頁）

これを『資本論』の G 形態と比較すると、第 1 に、相対的価値形態において、商品名と数量の表示が異なっている点は第 I 形態からの問題であるのでさておき、相対的価値形態の商品量が全て 1 単位になっていること、第 2 に、それに対応して、等価形態の商品量が決められていること、これらが特筆される。G 形態においては、相対的価値形態にある商品の数量が 1 単位として独立に決まることが示されている。

この点は、宇野においては、先の第Ⅲ形態における相対的価値形態の商品量が等価形態にたつ商品量に従属的に決定されとする主張に鑑みると、G 形態の意義を強調するものになっているといえよう。

では、『旧原論』においてはどうか。以下に『旧原論』の G 形態を示そう。

「鉄 1 トン＝金 2 オンス ／ 上衣 1 着＝金 1 オンス ／ 小麦 1 クォーター＝金

4 分の 3 オンス　／　・・・・　／　A 商品 1 単位＝金 x オンス」（『旧原論』41 頁）

みられるように、価値式の表示方法は、相対的価値形態にある商品にかんしては『価値論』のそれを同様だが、等価形態に立つ商品については異なっている。『旧原論』においては、「金 x オンス」のように、商品名（金）が先に示されている。

そしてこの点は『新原論』においてもこれが踏襲されている。以下のようである。

「リンネル 1 ヤール は 金 幾何　／　茶 1 ポンド は 金 幾何」（『新原論』28 頁）

この点について、宇野は「注」において以下のように述べている。

「マルクスでは価値形態の等価物商品の使用価値が相対的価値形態の商品所有者の欲望の対象としてその数量を決定される点が明確にされなかったために、この貨幣形態では、逆に金の使用価値が直接に消費対象としてその数量を決定されないという点が不明確になっている。」（『新原論』28 頁）

いうまでもなく、G 形態における「金」は、貨幣としての金であり、基本的には直接の消費対象[21]ではないので、ある特定の数量が独立的に決まることはないということである。ここにおいて、第 I 形態から試みられた宇野の価値形態は完成をみたといえよう。

では、関根翻訳はどうだろうか。G 形態は以下のように示されている。

「one yard of linen is worth so much gold　／　one pound of tea is worth another quantity of gold」（P.,p.7）

すでに指摘したように、ここでも相対的価値形態と価値形態の表示は「数量・商品名」となっている。いうまでもなく英語における一般的な表現で示されているのである。

しかし、ここにおいても、あえて以下のような記述の仕方を提起してみたい。

linen, one yard is worth gold, so much　／　tea, one pound is worth gold, another quantity

あるいは、以下のようにである。

linen, 1 yard ＝ gold, so much　／　tea, 1 pound ＝ gold, another quantity

むろん、異論もあろう。通常の英語表現を無視した強引な記述法だという批判もあろう。だが、宇野の価値形態論にかんするする思考の深化が価値式の記述方法にあらわれている点を重視することは出来ないだろうか。そして、それを英語表現に反映することができないだろうかと思うしだいである。

4. 結語

やや繰り返しになるが全体をまとめておこう。

戦後まもなくの「資本論研究会」での発言から開始された、宇野の価値論なかんづく価値形態論の研究は、その後も徐々に進化ないし深化していった。むろん、『資本論』冒頭での蒸留法による価値論の論証の止揚にも関連するが、それは、価値形態論にフォーカスすれば、価値式の両極性の明確化、さらにいえば価値式の表示方法の問題に端的にあらわれているといえよう。

『資本論』では、相対的価値形態の商品も等価形態に立つ商品もその表示方法は、全て

[21] 金は、貨幣以外にも、工業用や装飾用などで使用されているが、ここでは貨幣としての金の意味を強調してのことである。

「数量・商品名」の順であった。むろんこれは欧州圏の言語による影響が大きいことはいうまでもないが、こうした表現に宇野は異論を提起した。第Ⅰ形態から貨幣形態に至るまでその各形態の意義を反映させるものとして、それぞれの表示方法が工夫されていった。それらは、『価値論』および旧・新の『経済原論』に思考の痕跡を辿ることで明らかになった。宇野による価値形態論研究の結晶が価値式における商品名と数量の表記の方法にあるのではなかろうか。

そのような観点から、関根友彦による翻訳版、*Principles of Political Economy* を吟味した。それは、『新原論』を底本とした英訳版であり、実に画期的な試みであることは多言を要しまい。英語圏の読者に多大な刺激を与えたことだろう。

そこで、件の価値式の表示方法に着目すると、それらはきわめてオーソドックスな記述による翻訳となっていたといえる。むろん、英語などの表現の常識からいえば、こうしたことは当然かも知れない。

しかし、これまでみてきたように、宇野が思考を重ねた価値式の表示方法を英語においても表現できないだろうか。無謀かも知れないが、本稿においてそうした提起を試みた。大方のご批判を仰ぎたいと考える。

文 献

【K.マルクス、宇野弘蔵、関根友彦の文献】

K.Marx、*Das Kaital, Band 1*, Marx-Engels Werke, Band 23, Dietz Verlag.（引用のさいは頁数を略記で示す。）

マルクス『資本論』第 1 巻（岡崎次郎訳『資本論』、大月書店、1968 年。引用のさいは頁数を略記で示す。なお、日本語訳は、特に示さない限り本、大月書店版を用いる。）

マルクス『資本論』第 1 巻（向坂逸郎訳『資本論』、岩波書店、1967 年。引用のさいは頁数を略記で示す。）

K.Marx（Translated by S.Moor & E.Aveling）、*Capital, Volume 1*, Progress Publishers. Moscow.1974.（引用のさいは頁数を略記で示す。）

K.Marx、*Das Kaital, Erster Band* , *Erste Ausgabe,* Verlag von Otto Meisner.（初版復刻版、青木書店）

マルクス『資本論・第 1 巻・初版』（岡崎次郎訳『資本論』、大月書店、1976 年。引用のさいは頁数を略記で示す。）

向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究』（至誠堂、1958 年。初版は河出書房、上下 2 巻、1948～49 年）

宇野弘蔵『価値論』（『宇野弘蔵著作集』第 3 巻、岩波書店、1973 年。なお、初版も岩波書店 1947 年）

宇野弘蔵『経済原論』（『宇野弘蔵著作集』第 1 巻、岩波書店、1973 年。なお、初版、上下 2 巻本、岩波書店は 1950～52 年）。『旧原論』と略記する場合がある。

宇野弘蔵『経済原論』（「岩波全書」岩波書店、1964 年）。『新原論』と略記する場合がある。

宇野弘蔵編『資本論研究』Ⅰ～Ⅴ（筑摩書房、1967～68 年）

宇野弘蔵『資本論五十年』上下（法政大学出版局、1970～73 年）

Thomas T. Sekine, *Principles of Political Economy－Theory of a Purely Capitalist Society－*,Harvester & Humanities, UK & USA, 1980.（引用のさいは頁数を略記で示す。）

【その他の文献】

伊藤誠［1989］『資本主義経済の理論』岩波書店
泉正樹・江原慶・柴崎慎也・結城剛志［2019］『これからの経済原論』ぱる出版
岩田弘［1972］『マルクス経済学』上、風媒社
大内力『経済原論』上［1981］（『大内力経済学体系』第 2 巻）東京大学出版会
大内力・戸原四郎・大内秀明［1966］『経済学概論』（大内秀明執筆）東京大学出版会
大内秀明・鎌倉孝夫編［1976］『経済原論』（鎌倉孝夫執筆）有斐閣
大島清編［1976］『現代経済入門』（小林弥六執筆）東京大学出版会
奥山忠信［1990］『貨幣理論の形成と展開』社会評論社
小幡道昭［2009］『経済原論』東京大学出版会
海大汎［2021］『貨幣の原理・尊容の原理』社会評論社
鎌倉孝夫［1996］『資本主義の経済理論』有斐閣
小林弥六［1969］『流通形態論の研究』青木書店
櫻井毅・浜田好通・春田素夫・山口重克・永谷清・河西勝［1979］『経済原論』世界書院
菅原陽心［2012］『経済原論』御茶の水書房
鈴木鴻一郎編［1960］『経済学原理論』東京大学出版会
武井邦夫［1974］『経済学原理』時潮社
田中史郎［1991］『商品と貨幣の論理』白順社
田中史郎［2004］「商品論の検討」、半田正樹・工藤昭彦編『現代の資本主義を読む』批評社
田中史郎［2011］「経済学における方法的『縮図論』」、『経済志林』第 78 巻第 4 号、2011 年
永谷清［1970］『資本主義の基礎形態』御茶の水書房
日高普［1964］『経済原論』時潮社
廣松渉［1974］『資本論の哲学』現代評論社
降旗節雄［1974］『マルクス経済学の理論構造』筑摩書房
山口重克［1985］『経済原論講義』東京大学出版会